

高密度集住エリアにおける居住空間の研究

ー バンコク・クロントイの70ライ地区を事例として ー



AK13106 森 海人

Keywords

スラム 高密度集住エリア 土間
路地 過ごしやすい空間 閾の概念

1. はじめに

1.1 研究背景

現在、地球規模の問題として発展途上国を中心とする都市のスラム人口の増加が挙げられる。一般に劣悪な環境下での高密度集住エリアはスラムと呼ばれている。スラムはインフォーマルな居住形態であることが多く、また、不衛生な環境、犯罪の温床となりやすいことから否定的に捉えられることが多い。しかし高密度集住かつ厳しい居住条件のもとで、人々はスラムを住みこなしている。スラムならではの住居空間や路地空間の要素を利用して、快適性をつくり出していると考えられる。建築家でもデザイナーでもない一般の人々が自らの利潤あるいは居住の満足度を最大限にする試みは、どのように空間に反映されているのだろうか。

スラム問題の解決策として、政府が打ち出すスラムから公共住宅への移転政策に対し、多くの住人がそれを拒否するという事例が各国で頻繁に起きている。彼らがスラムにとどまる理由は、経済面のみではない。都市で暮らしていくためにスラム内での相互扶助的社会的関係は欠くことができないものであり、それを失いたくないという欲求は強い。このような社会的関係は高密度集住であり貧困であるスラムの住民にとっては必要不可欠なものであると考える。

1.2 研究目的

本研究では、都市において自然発生的に生まれた高密度集住エリアで、人はどのような工夫をして狭い敷地や建物を住みこなしているのかをスラムを事例として調査する。こうした分析からスラムの居住環境を改善する可能性を探り、また日本の都市における高密度集住を再考する有用な知見を得ることを目的としている。

1.3 先行研究の検討

C・ストークスは1960年に、スラムの心理的類型には「希望のスラム」と「絶望のスラム」があると発表した。
・希望のスラム：そこに住む人の多くが、そこを人生の過渡的な仮の住居と考えている。今は豊かではないが、働いて富を蓄積した後、いつかはそこを出て、都市市民としての生活を享受したいと考えている。
・絶望のスラム：住民の多くが、そこを失敗続きだった人生の最後の地と考え、貧困のうちに滞留し続ける。

本研究はこの心理的類型を見直し、新たな類型があると仮定して分析を進める。

1.4 研究方法

本研究の元となる調査は、2016年9月10日から9月22日にわたり、タイ王国の首都バンコクに位置するクロントイの70ライ地区で行った。ケーススタディーとして2本の路地（ソイ12・13）に焦点を絞った。対象路地の平面図・路地に面する住居の立面図を60軒実測した。各住居平面図の実測・インタビューは共に14軒である。また、70ライ地区全体を把握するため、全体図を用い、住居の形態（商店等）・路地に置かれているもの（ベンチ、ゴミ箱、洗濯物、植木鉢等）を調査した。

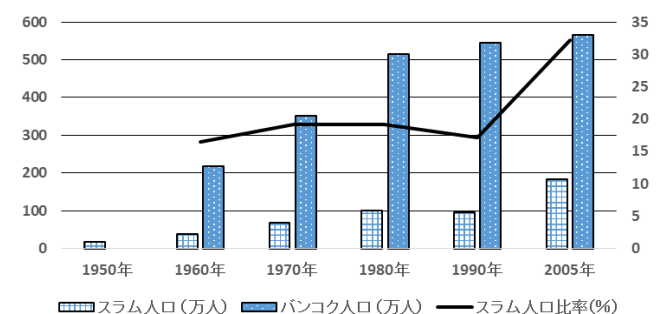
2. 調査地概要

2.1 タイのスラム

タイのスラム住民は生活水準を維持するためお互いに助け合ったり、小規模な会合を開いたりしている。近隣、親戚、友人などタイの伝統的な互助関係を形成しており、互酬性に基づくパトロン・クライアント関係（タイの場合、パトロンとは「親戚・同郷の人」を表すことが多い。スラムに新たに住む場合、親戚のつてを使うことが多いのである）が住民の生活を支えてきた。

2.2 バンコクのスラムの歴史

1940～50年代頃からバンコクにスラムが形成されはじめた。1960年の工業化により、農村から多くの労働力が都市に流入したが、彼らが購入可能な住宅は絶対的に不足し、また雇用先も限られていた。そのため、土地所有者との正式な契約がないままに、多くは線路や運河沿いにある寺院に住み始めた。グラフ1はバンコクのスラムの人口比率を表したものである。



グラフ 1 スラム人口比率（鐵2007）より筆者作成

2.3 高密度集住エリア

タイ最大の高密度集住エリア、クロントイは、バンコクのシャム湾の河口から28kmのチャオプラヤー川沿いに位置しており、クロントイ港に隣接している。19,522世帯、約10万人が居住しており、東南アジアで最大級のスラムである。チャオプラヤー河岸に位置するバンコク港の、荷役労働者のための仮小屋住居が拡大してスラムに至った。この地域は湿地帯であるため水はけが悪い。そのため雨季になると洪水被害が多くなり、路地脇の排水路から水と一緒にゴミが溢れ出て悪臭を漂わすことが問題視されている。また表1よりクロントイの高密度集住エリアがいかに人口過密地域であるかがわかる。

表 1 人口密度 (荻野、曾我部、田中、古谷2005)

人口密度 (人/㎥)	
クロントイ高密度集住エリア	15,800
バンコク	3,600

2.4 クロントイ・高密度集住エリアの変遷

1950年代から本格的な工業化に伴う港湾工事を目当てに、農村部からバンコクに大量に労働者が流入した。その労働者が土地契約のないままこの地に住み始めたことがきっかけでスラムが発生した。クロントイの高密度集住エリアには、現在に至るまでの約60年間、様々な政策がなされてきた。1950~60年代は古典的なスラム住宅政策、1960~80年代はサイトアンドサービスや自力建設、1980年には土地を一旦更地に戻し、一部を商業地として活用、残りを住民が居住用に再建し人口の密集化を図る土地分有事業が行われた。

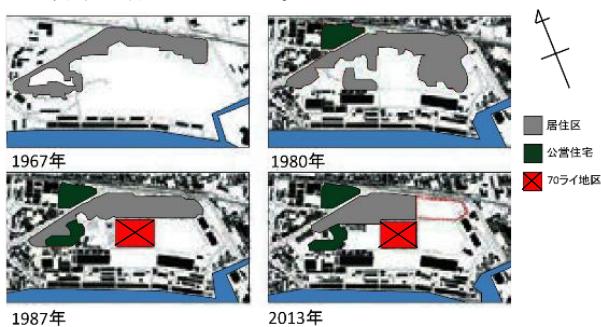


図 1 クロントイ・高密度集住エリアの変遷 (高橋、遠藤2014)

2.5 70ライ地区の概要

1980年に始まる60ヘクタールを対象とした土地分有事業において、70ライ地区 (面積: 約10ヘクタール) には、港湾開発に伴う移転事業としてサイトアンドサービス事業が実施された。NHA (National Housing Authority)は埋め立て整備を行い、道路や排水路を整備し、上水道や電気を供給した。それに加えて、所得に応じたコア・ハウスも用意された。港湾局は、1,300戸に対して1区画あたり48~60㎡の敷地を用意した。またNHAを通して、1㎡あたり1パーツ/月、20年間の借地権が設定された。

70ライ地区には路地 (ソイ) が40本、公園が6か所、

広場が2か所ある。また、水路が2本あり、70ライ地区南側の川へ続いている。70ライ地区南東にはタイ王国陸軍の援助によって建設された142戸の住居が建ち並ぶ「バンガルン」と呼ばれる地区があり、最貧困層地区に位置づけられる。区画が整備されたことによって図2のように70ライ地区は一般のスラムとは異なる街区になっている。

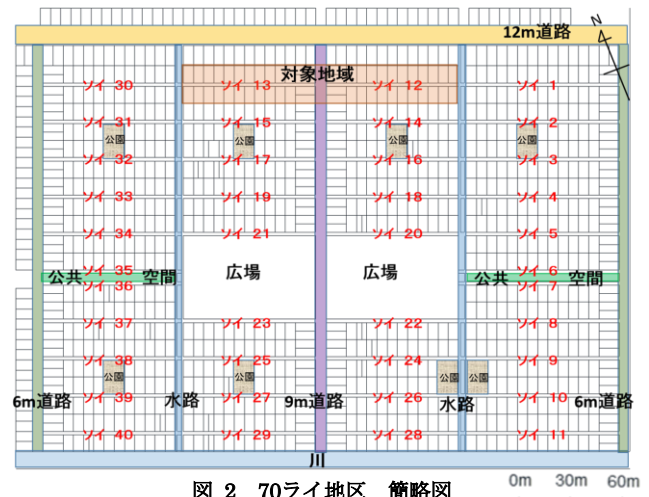


図 2 70ライ地区 簡略図

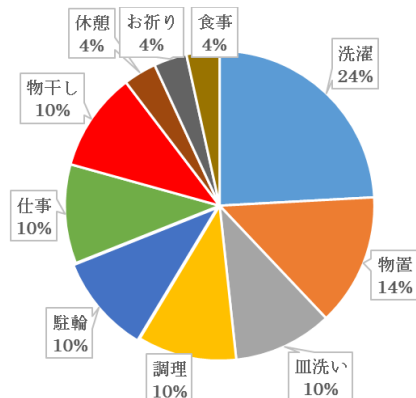
3. 住居空間

3.1 住居分析

1Fは大空間であり、食事や睡眠など様々な使われ方をしていたので、生活の中心は1Fといえる。2Fは寝室として使われることが多く、使われていない住居も見られた。また土間での行為が多様であり活発であることがわかった。1Fが生活の中心になるのは土間の使われ方の多様性が要因と考えられる。また洪水対策のため土間を路地より高くしたり住居内部を土間より一段高くしたりするなどの工夫も見られた。

3.2 土間の使い方と増改築

土間がある住居は11軒見られた。土間では、住民は①洗濯②物置③駐輪④皿洗い⑤仕事⑥調理⑦物干し⑧休憩⑨お祈り⑩食事の10種類の使い方をしていった。グラフ2は土間の使われ方の比率を表したものである。使われ方で一番多いのは洗濯である。土間で洗濯が行われる理由として、土間や路地空間で物干しが行われることが多いからだと考えられる。



グラフ 2 土間の使い方

増改築をしている7軒中6軒の住居は玄関の扉を1Fの壁の高さまで高くし、プライバシーを確保している。洗濯や調理など住居内での行為が土間で行われている場合、土間での行為を保護し、活発化させる増改築が行われている傾向にある。増改築は、住民自らが利便性を高めるために行われる。

表 2 増改築と土間の使い方

増改築	場所	理由	土間での行為
no.1	玄関の扉、階段と軒先 部屋の分割	プライバシーの確保 防犯面の強化、家族が増えた	洗濯・コインランドリー(仕事)
no.2	2F 全部、玄関の扉 1F 内装、階段、外装	家族が増えた 人と同じ家は嫌だった	駐輪・物置
no.3	右下のトイレ兼風呂	2番目の娘の風呂が長い	物干し・物置
no.4	土間部分の屋根(トタン、 支えは木材)、玄関の扉	雨が降ると濡れる プライバシーの確保	洗濯・皿洗い 調理・物置
no.6	壊れているところ 玄関の扉	古くなって危ない プライバシーの確保	洗濯・調理 皿洗い
no.7	玄関の扉	プライバシーの確保	洗濯・駐輪 祭壇・物置
no.10	壊れているところ 玄関の扉	危ないから、防犯面の強化 プライバシーの確保	洗濯・物干し・調理 皿洗い・食事

3.3 土間の開放

犯罪の温床となりやすいとされるこの地域では人々の防犯意識は高いと思われる。しかし観察調査から窓やドアを開けっぱなしにして、土間を路地に開放している住居が多い。70ライ地区では防犯意識よりも誰かが見守ってくれているという安心感と仲間意識があると考えられる。

4. 路地空間

4.1 ソイに置かれているモノ

全体調査として、路地に置かれているモノ(ベンチ・机、ゴミ箱、政府指定のゴミ箱、植木鉢、花壇、洗濯物、祭壇)の数を表3にまとめた。全体平均と比べると公共空間とバンガルス(ソイ8、9、10、11)は置かれているモノの数が突出して多い地域であることがわかった。

表 3 置かれているモノ

	ベンチ 机	ゴミ 箱	政府指定 ゴミ箱	植木 鉢	花壇	洗濯 物	ゴミ箱 合計	緑合 計	祭壇
平均	6.8	4.1	1.5	64.6	2.7	5.6	5.6	67.2	0.9
東公共空間	27	6	3	166	8	11	9	173	8
西公共空間	48	3	2	25	0	9	6	25	0
ソイ 8	4	14	0	98	5	20	14	103	1
ソイ 9	5	8	5	80	5	12	13	85	0
ソイ 10	4	11	2	67	4	12	13	71	1
ソイ 11	2	8	0	32	0	4	8	32	0

4.2 東西公共空間の使われ方

東公共空間では多くの人が様々な行為をするのが見られた。洗濯や食事、休憩、仕事、調理、皿洗い、お祈り、駐輪、駐車等である。東公共空間はベンチや植木鉢、花壇の数も多く、居心地の良い空間であり、住民の行為は活発である。西公共空間では人は集まっていなかった。西公共空間はベンチの数が他の路地よりも圧倒的に多い。しかし植木鉢や花壇、樹木はあまり見られなかった。また公共空間は路地との仕切りは少なく、閉塞感を感じない。浅川の研究では「住民の満足率の向上には樹木地の

存在が重要である」という。この考えに沿えば、より過ごしやすいのは東の公共空間と言える。

4.3 バンガルス

ソイ8、9、10、11のバンガルスは、最貧困層地区に位置づけられる。平屋であり、70ライ地区の建設ルールである0.5mのバッファゾーンも設けられていない。この地域は70ライ地区の一般的な路地よりも洗濯物を干している住居が多い。バンガルスは住居が狭く、住居内に洗濯物を干す場所がないからだと考えられる。しかし、ソイ11は洗濯物を干している住居が4軒と少ない。図3のように河川脇の歩道を不法占拠し、そこで洗濯物を干しているからだと考えられる。

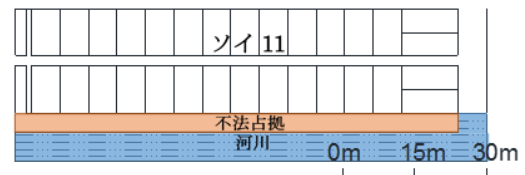


図 3 不法占拠

4.4 あふれ出しているモノ

1994年に行われたあふれ出しの研究では、「路地のあふれ出しは、路地空間利用行為を活性化し、結果的に路地居住者間のコミュニケーションの機会を増大させる」という。また、「植木などのあふれ出しは、居住者間の人間関係を親密なものとする」という。住居の内部から路地にあふれ出しているモノは洗濯物が特に多かった。路地空間で洗濯物を干すという行為は、近隣住民と顔を合わせる機会を多くする。70ライ地区では多くの植木鉢や花壇、樹木が見られる。住民自らより良い近隣関係を築こうとしている。またベンチも多く、配置されている場所は日陰になっている傾向にある。住民自ら布などを使ったり、樹木を植えたりして日陰を作っているという。ベンチは向かい合わせで配置され、会話しやすくする工夫も見られた。

これらの路地に置かれているものは、住民が快適性を作り出す工夫であると考えられる。しかし、住居内からあふれ出ているものやベンチ等の置かれているものによって路地が狭くなってしまいうという現状がある。

5. まとめ

5.1 関の概念

図4はの関の概念である。山本は『「関」はprivate realm(私的領域)に含まれる空間であるとともにpublic realm(公的領域: 言論中心)に対して開かれた空間である。「関」は私的領域の内側にあつて、それでもなお公的領域に属する空間である。「関」を含まないプライバシーのための空間は“private sphere”である。また関はそこに住む人々を結びつけると同時に分け隔てるための建築的装置である』という。具体的にはホワイエ、風除室、気密室、土間のような空間である。

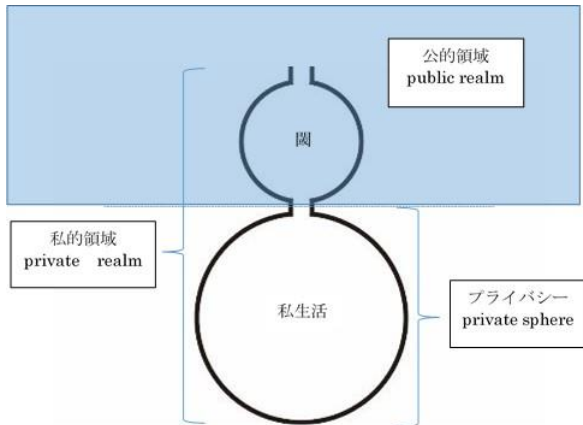


図4 閘の概念 (山本2015)

70ライ地区では住民が通行や会話などをする路地は公的領域である。住民はその公的領域で洗濯物を干すなどの私的行為を行っている。これは70ライ地区の住民にとって、自らの住居が面する路地は私的領域とも認識されているからである。閘は私的領域の中の公的領域であるので、70ライ地区の閘は「路地」と考えられる(図5)。また土間での行為は活発であり、増築によりプライバシーが保護されるようになった。しかし、前述したようにドアを路地に開放している住居が多い。これは路地を閘として認識し、プライバシーの保護をしつつも、近隣住民との関わりを望んでいるからといえる。近隣住民と関わることは、相互扶助的社會関係を再生産する。

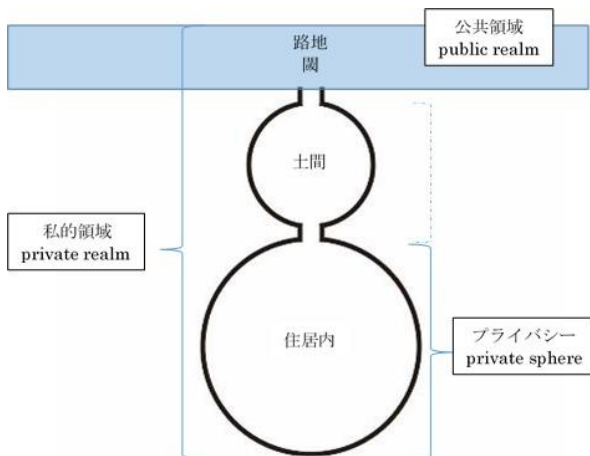


図5 70ライ地区の閘の概念

5.2 スラムの類型

ここで、1.3で述べたスラムの類型を再考する。

- ・希望のスラムは自身の向上心はあるが地区全体の環境を良くしようという向上心はない。
- ・絶望のスラムは自身の向上心も地区全体の環境を良くしようとする向上心もない。

70ライ地区では、住民同士で路地を清掃したり、植木鉢を置いたりして、過ごしやすい空間をつくっている。また、インタビュー調査から70ライ地区を出ていく生活力はあるが、出ていきたくない人がいるという。以上より70ライ地区は自身の向上心もあり、地区全体の環境を

良くしようとする向上心もある地区である。また、「緑・良好な近隣関係」といったスラムとは正反対のイメージを持つ。これはスラムの新たな類型というよりも、スラムから脱却しつつあるものと考えられる。

6. おわりに

6.1 研究を踏まえて

70ライ地区における研究を踏まえて、スラムの居住環境を改善する可能性と日本の都市における高密度集住について考える。日本の高密度集住は形態としては集合しながら、隣人や近隣とまったく未知の関係であることが問題視されている。閘の「分け隔てる」という機能が「結びつける」という機能を上回っているからだと考えられる。これは一般的なスラムでもいえることである。70ライ地区の住民は路地で私的行為を行い、近隣住民と関わる機会を増やしている。積極的に住民同士結びつこうとしているのがうかがえる。70ライ地区の閘は「結びつける」という機能が「分け隔てる」という機能を上回っているといえる。

スラムと日本の集合住宅には、私的領域と公的領域を兼ね備え、結びつけるための「閘」のような空間が必要である。行為が多様になるためにはその空間は大きくなければならない。行為が多様になると関わる回数も多くなる。また、結びつきを強くするために住民同士でその閘の環境を良くすることが重要であると考えられる。また、スラムでは、「住民同士協力しよう」という住民の意識の変化が第一に必要である。

6.2 今後の課題

今回の調査で、東公共空間とバンガルスが他の路地と比べ、異質な地域であることがわかった。また狭い敷地と建物を住みこなす工夫が多く見られる地域であると思われる。これらの地域を調査し、新たな知見を得ることが今後の課題である。

参考文献

- ・新津晃一『現代アジアのスラム』、明石書店、1989年
- ・山本理顕『権力の空間／空間の権力』、明石書店、2005年
- ・川澄厚志、藤井敏信「タイにおける住民参加型コミュニティ開発に関する考察」2005年
- ・鐵和弘「スラム再考：理論と現実」2007年
- ・田村順子・志摩憲寿「70ライ地区でサイトアンドサービスによる住宅供給メカニズムの研究」2012年
- ・高橋良至、遠藤秀平「東南アジアのスラムにおける経済成長に促した住環境整備手法の研究」2014年
- ・青木義次、湯浅義晴、大佛俊泰「あふれ出しの社会心理学的効果 路地空間のあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証」1994年
- ・浅川昭一郎「都市住民の緑の意識に関する研究」1986年
- ・人見泰弘「バンコクにおける都市スラムの現状と課題」2013年
- ・萩野祐介、曾我部紘、田中智之、古谷誠章「Hyper Complex Cities in Bangkok」2005年